

日本語母語話者が語る「面白い話」は字幕翻訳で伝わるか
—フランスの日本語学習者を対象とした質問紙調査の分析結果から—

山元 淑乃・ムートン ジスラン

(琉球大学・沖縄国際大学)

Abstract

This research paper presents the findings of the questionnaire survey for Japanese language learners at a University in France, in order to explore how effectively they understand and are able to evaluate "My Funny Talk," which is spoken by Japanese native speakers, translated and subtitled in French in videos. The evaluation of humor in the stories are lower in France than Japan overall. The evaluation showed correlations with Helpfulness of Subtitle, Helpfulness of Sound and Japanese Language Proficiency and Gender. From the analysis of these correlations the possibility of the following specific trends in Japanese Language Learners in France were recognized: 1) Subtitles are used to understand the stories, 2) Females use subtitles more than males to understand the stories, 3) Understanding of the stories does not lead to an evaluation of humor, 4) More information from sound than subtitle is used to evaluate humor, and 5) Males use Japanese language proficiency more than females to comprehend humor.

1 はじめに

1.1 研究目的

一般の日本語母語話者によって語られる「面白さ」は、それが映像になり、翻訳され、字幕が付されることによって、外国語母語話者や日本語学習者にどの程度伝えることができるのだろうか。「面白さ」が理解されるためには、音声や字幕翻訳はどの程度活用されているのだろうか。

本稿は、一般の日本語母語話者や日本語学習者を対象とした民間話芸調査研究「わたしのちょっと面白い話コンテスト」の投稿作品である「わたしのちょっと面白い話」(フランス語字幕版)を、フランス語を母語とする日本語学習者が、どう評価し、音声や字幕をどの程度活用したと感じたかを、質問紙により調査することにより、映像字幕翻訳の可能性と限界を論じるための一考察を行うことを目的とする。

YAMAMOTO Yoshino, MOUTON Ghislain "Comprehension and Evaluation of "My Funny Talk" in Japanese by Japanese Language Learners: through the Analysis of Questionnaire Survey in France," *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No.16, 2016. pages 84-95. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

なお、本稿の執筆担当については、統計分析に関する箇所を第一、第二執筆者が共同で執筆し、それ以外の部分については第一執筆者が担当した。

1.2 先行研究

字幕翻訳についての学術的研究は、英語から他の言語への翻訳ストラテジーを扱った研究を中心に1990年代から発展してきた分野である(Gottlieb 1992、河原 2011 など)が、フランスにおいてはそもそも翻訳者の位置づけが日本に比べて低く¹、字幕翻訳に至っては、*art mineur*(マイナーな芸術)であり、必要だから「我慢する」ものであり(Marleau 1980)、「裏切り」であるとまで述べられ(Gautier 1981)、批判の対象とさえなってきた。しかし近年、複言語主義の広がりとともに、字幕翻訳を学術的に再考し、肯定的に捉える動きも出てきた。Gambier(1999)によると、字幕翻訳に特徴的な問題は(1)時空に関する問題(一行当たりの文字数、スクリーンに出すタイミングとスクリーンに出る時間(字幕の速さ)、字幕と字幕の間のポーズ、画像と字幕の間の同時性など)と、(2)文字に関する問題(文字による情報の多さ、解釈と直訳の一体化、句読記号の意味など)に分類される。Gambier(2007)はその問題を踏まえ、字幕翻訳のストラテジーとして *paraphrase* (言い換え)、*condensé*(収縮)、*transposition* (転位)、*omission*(切り捨て)を挙げている。日本語から他言語への字幕翻訳を対象としたストラテジー研究には、小谷(2004)や矢田(2013)などがある。

また、Pelletier-Gagnon(2012)によると、日仏翻訳の大半は漫画やゲームの商業翻訳であり、ここでは「翻訳しにくい」または「日本の文化的要素が多すぎる」ものは売れないため敬遠されるが、このようにして敬遠されたゲームやアニメが、ファンにより非公式に翻訳され、その字幕は「ファンサブ」とよばれて動画共有サイトに掲載されている。ここでの翻訳者の役目は「原作に対する想い、尊敬と他のファンと分かち合いたいという気持ち」を込めて、日本のエスプリを字幕翻訳に変貌させることである。Gonzales(2009)にはファンサブにみられる、次のような画期的な翻訳ルールが紹介されている:(1)字幕のフォントとサイズを自由に変える(2)シーンタイミング(Scene timing)を自由に変えて、場面によって、画像と字幕の順番を入れ替える(3)テキストの途中に翻訳者の解説やコメントを入れる。

一方、ユーモアの翻訳については、Chiaro(2010)が詳細な先行研究の調査を行い、様々な問題点や可能性を議論している。Chiaro(2010)では主に英語からイタリア語やスペイン語など他の言語への様々な翻訳例が取り上げられ、さらに、たとえ同じ言語を有するアメリカとイギリスの間でも文化差によりユーモアが伝わらない例などが紹介されている。

このように、字幕翻訳やユーモアの翻訳に関する先行研究は少なからず存在するが、その大半が、様々な翻訳事例について、個別に検討を加えたり、翻訳ストラテジーを検証したりするものである。翻訳の受け取り手である視聴者に対する調査を行った研究には菅野(2011)や Schaffler(2012)が存在するが、未だ僅かである。本研究のように、翻訳者自らがその翻訳について、フランス人日本語学習者という受け取り手に対して問いかける形式の調査は、管見の限りない。

1.3 「わたしのちょっと面白い話コンテスト」とは

民間話芸調査研究「わたしのちょっと面白い話コンテスト」は、音声言語の研究データ共有化のための取組として、旧神戸大学メディア文化研究センター(現在は神戸大学大学院国際文化学

研究科国際文化学研究推進センター)主催により、2010年から毎年一回実施され、今後も継続される予定である。全ての投稿作品には日本語字幕がつけられ、インターネット上に著作権フリーで公開されている。

この取り組みは、「面白い話を収録」「音声動画での収録」「コンテスト方式で収録」「字幕付きで公開」という4点を特徴とする。音声言語データを「オープン化」し、それによってデータの共有が促進されることで、音声言語研究と日本語教育への貢献を目指すものである(定延他 2014)。「面白い話」を収録する理由は、「面白い話」であれば誰しもが興味を覚えやすいことから、データの共有化が進みやすいと考えられるためである。

第1回目である2010年度の参加作品には全て、日本語の他にも、多言語(英語、中国語、フランス語)による字幕がつけられており、今後も多言語化が進められる予定である。筆者らはこのうち、フランス語字幕の監訳を担当した。本調査では、このフランス語字幕の付された「わたしのちょっと面白い話コンテスト」2010年度参加作品を活用する。

1.4 翻訳の妥当性基準について

筆者らは「わたしのちょっと面白い話」の翻訳にあたり、翻訳の妥当性基準を翻訳の目的に置く機能主義的翻訳論(Vermeer 1996)の立場を踏襲し、その翻訳が日本語音声言語データの共有を目指した民間話芸調査の一環であることから、翻訳の目的を「日本語母語話者が何を面白いと感じているのかをフランス語母語話者に伝える、そして可能であれば面白さを感じさせ、笑わせること」とした。この翻訳の目的が、視聴者を「笑わせること」が優先させる商業翻訳の目的とは、大きく異なる。筆者らはこの目的を踏まえ、Lawrence Venuti によって主に論じられてきた同化(domestication)と異化(foreignization)という対立概念(Venuti 1995、1998、2000)を中心に、様々な翻訳理論を概観した上で、翻訳の方針の立案を試みた。様々な翻訳の具体例の検討の結果、翻訳の方針は翻訳の目的から自動的に示されることはなく、個々の例からボトムアップ式に示されたものであった。その基本方針を以下に示す。

1. 異化翻訳を優先し、意味の類似性と音の類似性を、できる限り高める。その際、自然なフランス語への翻訳では面白さが伝わらないと判断された場合には、フランス語の自然さより日本語への忠実さを優先する。「意味の類似性」と「音の類似性」の優先順位は内容によって適宜決定する。
2. 面白さの中心的な部分であるため理解が必要な箇所について、異化翻訳では伝わらないと判断されたものについては、同化翻訳を検討し、うまく伝わりそうな場合は同化翻訳を採用する。枝葉末節な部分は異化翻訳のまま残す。
3. 同化翻訳でも伝えるのが難しい、またはニュアンスが変わってしまうような場合には、注釈を付す。

さらに、この方針で実際に翻訳にあたっても、自然なフランス語への異化翻訳では、面白さが伝えられない箇所が多々登場し、フランス語の自然さを犠牲にし、意味の類似性や音の類似性を高める必要が出てきた。これが、「自然で正しいフランス語」への翻訳が前提とされてきた、多くの日仏

翻訳に関する先行研究とは異なる点である。具体的な翻訳例や対応策については、山元(近刊)で詳細に述べる。

2 調査

2.1 倫理的配慮と研究参加者

研究参加者は、フランス国内の国立大学で日本学を専攻する、1年生から3年生までの日本語学習者である。大学での日本語の授業終了時に参加を募り、1) 研究目的、2) 研究参加は自由意志に基づくこと、3) 研究に不参加の場合にも不利益は被らないこと、4) データの厳重な管理、6) 匿名性の確保、7) 同意撤回の可能性、について文書と口頭により説明し、同意を得た137名を研究参加者とした。研究参加者の属性の内訳は表1の通りである。

表1 研究参加者の属性

学年	1年生(72名) 2年生(48名) 3年生(17名)
性別	男性(46名) 女性(91名)
日本語運用能力 (自己評価)	1: 話せない(7名) 2: 少し話せるが会話を続けることはできない(84名) 3: 日常的なやりとりができる(45名) 4: 専門的なやりとりができる(1名) 5: 母語話者並のやりとりができる(0名)

研究参加者は全体137名で、男性が46名で女性が91名と、量も充分であるとは言えず、男女間にも偏りがあった。今回の調査で得られた傾向や示唆を、さらに確定的なものにするためには、より大きな量の、偏りの少ないデータを分析する必要があるだろう。今後の課題としたい。

2.2 質問紙調査

質問紙調査は2014年11月に、研究参加者の在籍大学で行った。まず、研究参加者に、属性(性別、年齢、学年、日本滞在歴)と日本語運用能力についての質問に回答してもらった。日本語運用能力は、日本語での口頭のやりとり全般について、5段階(1:できない、2:少しできるが会話を続けることはできない、3:日常会話レベルのやりとりができる、4:アカデミックレベルのやりとりができる、5:母語話者並のやりとりができる)から自己評価にもとづいて選択してもらった。また、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages)の自己評価レベルと、日本語能力試験のレベルについても併せて質問し、情報を得た。次に、動画についての質問に回答してもらった。各作品につき一回のみ動画を視聴してもらい、各動画の終了ごとに、よく考えた上で回答できるよう十分な時間を設け、質問紙に記入してもらった。質問紙の例(日本語訳)を表2に示す。動画は計5本で、質問項目は全て同じである。

表 2 質問紙の例

動画名：電車の中国人女性	総合評価：おもしろくない …1…2…3…4…5… おもしろい
おもしろい、またはおもしろくないと評価した理由	
内容の理解度 1：ほとんど分からない 2：あまり分からない 3：少し分かる 4：大体わかる 5：よく分かる	
情報の役立ち度 ・字幕（字幕として書かれたテキスト） 1：役立たない 2：あまり役立たない 3：少し役立つ 4：役立つ 5：とても役立つ ・語り（語られたテキストとして、文字化できる音声情報） 1：役立たない 2：あまり役立たない 3：少し役立つ 4：役立つ 5：とても役立つ ・音（声質、トーン、速さなど、文字化できない音声情報） 1：役立たない 2：あまり役立たない 3：少し役立つ 4：役立つ 5：とても役立つ ・映像（ジェスチャー、表情など） 1：役立たない 2：あまり役立たない 3：少し役立つ 4：役立つ 5：とても役立つ	

2.3 動画の選択基準と概要

調査に使用した動画は、2010年度「わたしのちょっと面白い話コンテスト」参加作品17本の中から、日本でのコンテスト3位までの入賞作品4本（3位は同点で2本）と、入賞作品ではないが、筆者らが日仏間で特に大きな差が出ると考えた作品1本（表3の動画2：作品番号2010104番）である。ただし、2010年度の参加作品の中には、音声のみ公開が了承され、映像が配信されていない作品もあった。本稿では音声のみに字幕が付された作品も、便宜的に「動画」とみなしている。本調査に使用された動画は、動画1と2が映像付きの音声動画、3から5は映像のない、字幕のみの音声動画である。動画の語り手は全員男性であった。本来なら、全てに映像付きの音声動画を使用し、語り手の性別も偏りが少なくなるよう配慮すべきであるが、本研究では日本のコンテストで高評価を得た、つまり日本で「面白い」と認められたということに重点を置き、調査にかかる時間の制約にも配慮し、この5作品とした。

各作品の、日本とフランスにおける評価の平均と順位は表3の通りである。表中の作品番号はコンテストウェブサイト上の番号であり、タイトルは筆者らが便宜上付したものである。作品は全て著作権フリーでコンテストウェブサイト上に公開されている [神戸大学大学院国際文化科学研究科国際文化科学研究推進センター online:「わたしのちょっと面白い話コンテスト」2010投稿作品.html]。

表 3 面白さの評価(5段階評価の平均)

作品番号	タイトル	日本	フランス
2010002	1. 電車の中国人女性	4.58 (2位)	2.69 (3位)
2010010	2. ぼちぼち帰るわ	—	2.01 (5位)
2010104	3. オドオドコンビニ店員	4.60 (1位)	2.98 (1位)
2010102	4. ぶち当たる	3.00 (3位)	2.39 (4位)
2010101	5. ひったくり防止看板	3.00 (3位)	2.89 (2位)
	平均	3.79	2.59

動画 1「電車の中国人女性」は、電車の中で、中国人らしき女性 3 人が「コカ・コーラを飲み過ぎると頭が禿げる」と大声で話している状況を描写した作品で、日本のコンテストでは第 2 位に入賞した。しかし、フランスでは禿頭をユーモアの対象とすることが「幼稚」「差別的」であるという意見が大半を占め、低評価を得た。

動画 2「ぼちぼち帰るわ」は、自宅でお酒を飲んでいるのにもかかわらず、ほろ酔いで、「ほな、ぼちぼち帰るわ」と発言してしまう男性の話である。この語り手は、そのような事実は全くないにも関わらず、妾宅にいるような気分で、「ほなボチボチ帰るわ」と口から出てしまい、大変な目に遭ったということであるが、筆者らは仕事帰りに居酒屋等にいる気分になって発言したものと理解していた。その場合、仕事帰りに頻繁に同僚や上司らとお酒を飲む習慣のある日本の会社文化を知る視聴者にとっては笑える話であるが、フランスにはそういう文化がない。また妾宅と想定された場合、フランスでは女性差別的であると批判される可能性が高い。この作品は、日本でのコンテスト入賞作品ではないが、このような背景文化の違いから、ユーモアの理解に日仏間で大きな差が出ると考えられたため、本調査に採用した。

動画 3「オドオドコンビニ店員」は、異様におどおどした、高校生ぐらいの年齢の女性コンビニ店員が、客に対して次々と失敗を続けてしまうという話で、日本のコンテストで第 1 位を獲得した作品である。コンビニ店員の失敗が時間の経過に従っていきいきと語られ、ストーリーが明瞭で、情景が想像しやすい内容である。フランスの調査でも「語りが上手」「声真似が上手」「ストーリーが面白い」とされ、映像がない音声動画であるにもかかわらず、最も評価が高かった。

動画 4「ぶち当たる」は、会社の電話で道順を説明する際に、T 字路に突き当たることを「道が『ぶち当たって』」と表現する、年配の女性の話である。会社の電話という場面と、「ぶち当たる」という語の持つ語感との間の違和感が、面白さを醸し出している。このオノマトペを含んだ複合語「ぶち当たる」のフランス語への音の翻訳が困難であり、それが低評価を得た原因の一つにもなっていると考えられる(山元 近刊)。

動画 5「ひったくり防止看板」は、町でみかけられたという「ひったくりするな！彼女ができないぞ！」と書かれた看板についての話である。日本のコンテストでは動画 4「ぶち当たる」と並んで、3 位に入賞した作品であり、フランスでも 2 位という、比較的高い評価を得た。

3 分析結果と考察

全体的な面白さの評価結果は、表 3 のとおり、日本が 3.79、フランスが 2.59 と、フランスでの評価が日本のものより低い。つまり、日本人にとって面白いと評価されたものが、何らかの事情で伝わらず、低い評価になったものと考えられる。

本稿では、質問紙調査の選択解答式の質問項目の中から、内容理解と面白さ評価に関わる要因について、それぞれ 5 段階選択式回答に基づいて、相関関係(スピアマン順位相関)を調べた統計的分析の結果を考察する。ただし内容理解の度合いとは、実際に理解できた度合いではなく、研究参加者が理解できたと感じた度合いである。その結果、内容理解と面白さ評価には、日本語能力、字幕の役立ち度、音の役立ち度という 3 つの要因との間に、なんらかの相関関係がみられることがわかった。字幕の役立ち度と音の役立ち度も、実際に理解や面白さの評価に役立ったかどうかではなく、あくまで視聴者の「役に立ったかどうか」という視聴直後の感覚を問うた答えである。実際の理解度はテストをすれば測定できるかもしれないが、同時に聞きながら読んだ音声と字幕が実際にどの程度理解に貢献したかを数値で測定することは困難であるため、研究参加者の感覚を問うことに統一し、その感覚の間の関係性を分析することで、面白さ評価と諸要因について関係性を発見することに努めた。

以下、本節ではそれぞれの要因と相関関係について分析と考察を行う。

3.1 内容理解と面白さの評価

内容の理解度と面白さの評価の間には、有意な相関関係がみられず、理解しているからといって、面白いと感じた訳ではないということがわかった。「わかった後でも面白いとは思わない」というコメントもみられた。つまり、面白さが伝わらないのは、内容理解が足りないからではなく、他の要因に原因があると考えられる。

この要因について調べるために、面白いまたは面白くなかったと感じた理由について、自由記述形式で回答してもらった。最も評価の低かった動画 2「ぼちぼち帰るわ」の評価理由には「文化の差を感じた」「フランスでは無意味なジョークだ」「典型的な日本の文化だ」などが挙げられた。動画 4「ぶち当たる」については「日本人向けの冗談だ」「笑うポイントがわからない」、動画 1「電車の中国人女性」については「内容が子供っぽい」「自分で面白いと言うのが面白くない」などのコメントが寄せられており、低評価の大きな要因には背景文化の差があると考えられる。また、字幕翻訳の問題点については、翻訳がフランス語の自然さの保持に捕われていたこと、意味の類似性に比べて音の類似性を実現できていなかったことなどが、面白さを伝えられなかった要因であると考えられる。字幕翻訳の問題点についての詳細は、山元(近刊)で詳しく論じる。

3.2 内容理解と字幕の役立ち度

表 4 は、内容の理解度と、字幕の役立ち度との間の、相関関係を表す。

表 4 内容理解と字幕の役立ち度の相関関係

	内容理解度				
	動画 1.	動画 2.	動画 3.	動画 4.	動画 5.
全体 (137 名)	0.267**	0.321***	0.288***	0.205*	
男性 (46 名)	—	—	—	—	—
女性 (91 名)	0.358***	0.443***	0.357***	0.300**	—

スピアマン順位相関係数, *p<.05 **p<.01 *** p<.001

動画 5「ひったくり防止看板」以外の作品について、「内容を理解できた」と感じた度合いと、「字幕が役に立った」と感じた度合いの間に相関関係がみられ、内容理解に字幕が役立っていることがわかる。また、男性だけをみた場合には相関関係がみられず、女性だけをみた場合には強い相関関係がみられたという大きな男女差から、女性の方が、内容理解のために字幕に頼る傾向があることが示唆された。これは、一般的に女性は男性より文章読解力に優れているとされる (Pease & Pease 2001) ことに関係している可能性が考えられるが、今回の調査結果のみから一般化することは難しく、より大規模で詳細な調査が必要である。また今回の調査では動画の発話者が全員男性であったため、女性の発話者の動画を使用した場合には変化があるかどうかについても、検討する必要がある。

3.3 面白さの評価と「音」の役立ち度

表 5 は、面白さの評価と、内容の理解度、字幕の役立ち度、音の役立ち度の間の相関関係を示す。面白さの評価と字幕の役立ち度の間に相関関係がみられたのは、動画 3 の「オドオドコンビニ店員」についてのみであった。これに対して、面白さの評価と、音の役立ち度の間には、動画 2 「ぼちぼち帰るわ」を除いて、4 つの動画について、相関関係がみられた。音の役立ち度とは、声質、トーン、語りの速さなど、「音」から得た情報が、どのぐらい役に立ったと思うかを質問し、5 段階評価の回答を得たものである。

表 5 面白さの評価と、字幕の役立ち度・音の役立ち度の相関関係

	面白さの評価 (n=137)				
	動画 1.	動画 2.	動画 3.	動画 4.	動画 5.
字幕の役立ち度	—	—	0.303***	—	—
音の役立ち度	0.317***		0.466***	0.388***	0.261***

スピアマン順位相関係数, *p<.05 **p<.01 *** p<.001

この結果から、たとえ日本語がわからなくても、音声による情報が、視聴者に面白さを伝えるのに役立っているという可能性があるといえる。日本語運用能力が低い学習者からも「語りがいきいきとしている」「声真似がうまい」「話し方が好きだ」といった、音声情報に対するコメントがあることも、その可能性を示唆している。

3.4 面白さの評価と日本語能力

表6は、面白さの評価と日本語運用能力の間の相関関係を表す。本調査で質問した「日本語運用能力」とは、上述のとおり、日本語の読み書きの能力ではなく、日本語での口頭のやりとり全般について、自己評価による5段階評価の回答を得たものである。

表6 面白さの評価と、日本語運用能力の相関関係

	面白さの評価				
	動画 1.	動画 2.	動画 3.	動画 4.	動画 5.
全体 (137名)	—	—	0.207*	—	—
男性 (46名)	—	—	0.425**	0.345*	0.398**
女性 (91名)	—	—	—	—	—

スピアマン順位相関係数, * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

面白さの評価と日本語運用能力の間には、研究参加者全体では動画3「オドオドコンビニ店員」についてのみ相関関係がみられた。しかし、男性だけをみると、動画3により強い相関関係がみられる他にも、動画4「ぶち当たる」と動画5「ひったくり防止看板」についても、相関関係がみられた。このことから、男性の方が女性よりも、面白さの評価に日本語運用能力が大きく影響している可能性がある。言い換えれば、女性の面白さ理解には、日本語運用能力以外の要因が、より大きく影響していると考えられるのである。

エリクソン他(2004)は、文脈を排除した日本語の「音声」のみから、日本語母語話者、英語母語話者、韓国語母語話者が、話し手の感情をどの程度理解できるかという調査を行っているが、その認識テストの結果によると、母語を問わず女性は男性よりも理解率が高いとされている。また、星野(1969)によると、表情略画を用いた感情的意味理解のテストにおいて、女子は男子より表情理解に優れているという。これらの先行研究が示す結果は、女性が男性よりも言葉以外の要因からの理解力が高いことを示している。また上述の、内容理解と字幕の役立ち度との間の相関関係にみられた男女差(表4)も、女性が男性よりも内容理解のために字幕という日本語能力以外のものを活用している可能性を示唆している。今回の調査からは、これらの調査結果の関連性を明らかにすることはできないが、興味深い共通点を持つ男女差であるといえる。今後、社会言語学や脳科学等、多分野に渡る研究が進むことが期待される。

4 まとめと今後の展望

以上、面白さの評価と、それに関係すると考えられる諸要因との間の相関関係を分析し、考察することにより、フランスの大学で日本語を学ぶ学習者について、以下の可能性が示唆された。

- 1) 日本語学習者は、日本語母語話者が語る「わたしのちょっと面白い話」の内容の理解に、字幕が役立ったと感じた。
- 2) 女性学習者は男性学習者より、内容理解のために、字幕が役立ったと感じている。

- 3) 日本語学習者にとって、内容を理解できたからといって、それが面白さの評価につながる訳ではない。
- 4) 日本語学習者にとって、字幕よりも、声質やトーンなどの「音」からの情報が、面白さの評価に貢献したという可能性がある。
- 5) 女性学習者に比べ、男性学習者による面白さの評価には、自らの日本語運用能力がより大きく影響を与えているという可能性がある。

字幕は「内容理解」に貢献し、音が「面白さ」の評価に貢献しているという可能性があることは、大変興味深い。定延他(2014)によると、音声言語は人間の言語として、文字言語よりも基礎的な位置を占めるという考えは、現代言語学の大前提となっているが、現実には音声言語の研究は文字言語の研究に比べて大きく立ち遅れており、このことは音声言語の教育にも影を落としているという。本研究で行った調査の結果からも、音声言語の研究や教育の重要性が指摘できるだろう。今後、本稿のように、著作権フリーの音声言語データが活用され、音声言語研究や音声言語教育が発展すること期待される。そして、翻訳研究に関しては、より「音」を考慮した字幕翻訳を検討していく必要があるだろう。

また、今後、本稿のような量的研究を継続することにより、日本語学習者全体の傾向が、広くみえてくることが期待できる。しかし、学習者個々人が、日本人のユーモアをどう理解し、何を感じたか、またなぜそう感じたかについては、量的研究から計り知ることはできない。それは、今回の調査で得た自由記述回答や、日本語非母語話者に対する詳細な聴き取りを行ったインタビューデータの質的分析を行うことにより、明らかにしていく必要がある。今後の課題としたい。

*本稿は、ヨーロッパ日本語教師会(AJE)、第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムにおける口頭発表「日本人の『ちょっと面白い話』は日本語学習者に伝わるか:フランスにおけるアンケート調査の分析結果から」の発表内容をもとに、発表を通じて頂いた助言やコメントを参考に、加筆、修正を行ったものである。

【謝辞】

研究参加者の募集と質問紙調査の実施にご協力頂いた杉江文子氏に感謝申し上げます。本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金による挑戦的萌芽研究(課題番号:15K12895)の成果を含んでいます。

【著者紹介】

山元淑乃(YAMAMOTO Yoshino)琉球大学国際教育センター講師。連絡先:ysn@lab.u-ryukyu.ac.jp
ムートンジスラン(MOUTON Ghislain)沖縄国際大学・琉球大学非常勤講師。「ひつじフランス語教室」代表。連絡先:hitsuji@gmail.com

【注】

1) 澤田 (2016) は「フランスの訳者が「解説」や「あとがき」を書くことはきわめて稀だ。のみならず、(日本の)訳者の名前が、原作者とほとんど遜色ないかたちで(ポイントは小さいにしても)表紙や背表紙に記されているということは、フランスではおよそ考えられないことであり、日本の翻訳者の特権と言ってもよい、たいへん有り難い制度なのだ。」と述べている。

【引用文献】

エリクソン, ドナ・大西眞由子・栗原はるか「感情音声の認識に関する男女差」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』53, 85-90.

河原清志 (2011) 「翻訳とは何かー研究としての翻訳(その12)」『翻訳通信』2011年8月号, 第2期 111号, 8-15.

小谷康子 (2004) 「日本映画における英・仏・伊の文化認識の相違がもたらす字幕のずれ: 文化的視点による字幕分類モデルの提示」『通訳研究』4, 103-120.

定延利之・田畑安希子・Pourik, I.・宿利由希子・山元淑乃・Ghislain, M.・新井潤・孟桂蘭・森庸子・奥村朋恵 (2014) 「音声言語研究のデータをオープン化する取組とその問題点」『じんもんこん 2014 論文集』3, 75-80. 情報処理学会.

澤田直 (2016) 「翻訳者とメティエ」『ふらんす』91(2), 17-18.

菅野ゆりか (2012) 「外国語学習とユーモア理解」『大阪女学院大学紀要』8, 181-199.

星野喜久三 (1969) 「表情の感情的意味理解に関する発達的研究」『教育心理学研究』17, 90-101.

矢田陽子 (2013) 「日西・映像翻訳方略定義の記号学的検証」『翻訳研究への招待』9, 19-36.

山元淑乃 (近刊) 『わたしのちょっと面白い話』を外国語に訳す: フランス語訳をめぐる『後思案』(仮題) ひつじ書房

Chiaro, Delia (2010) *Translation, Humour and the Media*. London and New York: Continuum.

Gambier, Y. (1999), "Qualité dans le sous-titrage : paramètres et implications, *Traduction-Transition-Translation*, Proceeding of the XV World Congress of FIT, vol.1 (août 1999), Paris : FIT, 151-157.

Gambier, Y. (2007), "Le sous-titrage, une traduction sélective", *TradTerm* (13) : 51-69.

Gautier, G. L. (1981), "La traduction au cinéma. Nécessité et trahison", *Image et son/Écran La revue du cinéma*, vol. 363 (juillet-août 1981) : 102-118.

Gonzales, L. P. (2009), "Fansubbing Anime : Insights into the "Butterfly Effect" of Globalization on Audiovisual Translation", *Perspectives : Studies in Translatology*, vol.14, no.4: 260-277.

Gottlieb, H. (1992). "Subtitling: A new university discipline". In G. Dollerup, & A. Lindergaard, (Eds.), *Teaching translation and Interpreting I*. Amsterdam : John Benjamins. : 161-170

Marleau, L. (1980), "Les sous-titres...un mal nécessaire", *Meta* 27 (3) : 271-285.

Pelletier-Gagnon, J. (2012), "La langue comme marqueur générique. Réaffectation de la langue japonaise dans la traduction amateur du visual novel", *Plurilinguisme dans les arts populaires*, vol. 3 : 70-9.1

Pease, B. & Pease, A. (2001) *Why men don't listen and women can't read maps*. Bantam Double Day

Publishers.

Schauffler, Svea F. (2012) *Investigating Subtitling Strategies for the Translation of Wordplay in Wallace and Gromit - An Audience Reception Study*. PhD thesis, University of Sheffield.

Venuti Lawrence (1995). *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London and New York: Routledge.

Venuti Lawrence (1998). *The Scandals of Translation: Towards an ethics of difference* London and New York: Routledge.

Venuti Lawrence (2000). *The Translation Studies Reader*. London and New York: Routledge.

Vermeer, Hans J. (1996) *A Skopos Theory of Translation (Some argument for and against)*. Heidelberg: TEXTconTEXT (Band1)

【引用ウェブサイト】

神戸大学大学院国際文化学研究科国際文化学研究推進センター (2010)「「わたしのちょっと面白い話コンテスト」2010 投稿作品」(2016年7月31日)

http://www.speech-data.jp/chotto/2010_sub